

検査の結果、太った人は一級で甲食というように、何より大切な食事に多い少ないの差があるといううわさがあつたときの句で、実際にはなかったと思います。

私も無事二十三年十月、舞鶴より帰りました。三年余りソ連におりましたが、環境のせいかも知れませんが、美しいと感じたことがありますでした。それが舞鶴の港に入るときの水路の兩岸の木の緑、特に竹林の緑が印象的でした。

夢に見たより美しき我が日本

私も下手な句を記しましたが、本当に無事に帰ってはや四十年、今でも思い出す暗いラーゲルに、泉のような灯を与えてくれた呑海さんにお礼を申したい気持ちです。

ソ連強制抑留体験記

千葉県 土橋 治 吉

終戦後、九月十三日にソ連シベリア地区のスウチャ

ン、トダゴー第十二收容所に收容されました。收容人員は二千八百人でした。收容生活は二年六か月でした。この間の労苦は言語ではとても表現することは不可能です。毎日が苦勞の連続でした。精神的・肉体的苦痛は計りきれないことばかりです。

日常の食べ物が不足していたことです。正しい配分がなかったんです。飯盒一杯を三人で配分するんですが、ドロドロのスープに等しいものです。燕麦、コウリヤン、大豆等、精製されてなく、皮がついたままです。牛馬に与える餌と同じです。お米は一回も食べたことがありませんでした。仕事に行く途中、青いキャベツの葉一枚が道に落ちていたのを拾い、食べたことが青物野菜の一回目で、これで終わりました。

また、仕事に行く途中、民家の軒端を通るのですが、時折りバケツの中に馬鈴薯の皮のむいたのが入っているんです。これを手を伸ばしてさっと取り上げ、拾い、ポケットの中に入れるんです。これを昼休みに飯盒の中に入れ、量を増大させて満腹感を味わうんです。

收容所の中に便所がありますが、建物より離れて建て

られてあります。冬期、雪の降る中では誰もこの離れた便所に行く人はいません。建物の入り口の扉の近くにて用たしをするんです。このため、春先になると溶け出すのです。そして悪臭が豚小屋と同様になります。

幕舎の中は冬期はツララが下がり、毎朝十人前後の方が亡くなりました。これは栄養失調です。だれもが声も出さず、静かに死亡しました。シラミがぞろぞろはい回っています。

痛快だったことは、収容所長の山羊一匹が収容所の中に逃げ込んで来たんです。雪が五十センチ積もっている二月中旬でした。この山羊を屠殺したんです。五人でした。解体した肉は三十人で配分したんです。後でわかって五人は五日間の重営倉に入れられました。

日常食事の配分は当番制でした。組十二人で一食、パン一本のときなど一本十二人に配分するときは、全員の目玉はギラギラ光っています。手製の木でつくった台計りで寸分くるいのない公平の配分です。豆屑ほどのパン屑でも配分するんです。

終戦後二年間は、シベリア地区は老人と子供ばかりし

かおりませんでした。若い人は男女一人も見かけませんでした。収容所は別ですが、作業所で一緒になる人たちにドイツ人、朝鮮人、タタル人、その他の人種がいました。ソ連は人種差別はしない、働く人種であればだれでも歓迎するということを知りました。彼らは元気ででした。

私たちは栄養失調ですから、歩くのがやっとですが、ドイツ人は電柱を立てるのに五人で十分ですが、私たちは十五人で立てるのにやっとでした。彼らは飯盒一杯二人で配分し、その他に馬鈴薯もくれるそうです。

また、私も三か月間、石炭掘作業に参加させられました。坑道の中では五十メートルくらい、また曲がり角にはランブ持ちの女性、二十歳位の方ですが、おります。毎日五人から七人の女性です。私は毎日の様に手を引かれましたが断りました。毎日これだけは食べるものも食べていないため、そういった衝動に駆られることはなかった。いかに食べものが人間活動の源であり、原動力となるということをいやがうえにも知ったのです。

終戦から舞鶴港に上陸するまでの間は生きたそらはあ

りませんでした。草の根、葉、木の皮、何でも飯盒に入れて煮て食べたこと、よく生きて日本に帰って来たことなど、思い出は尽きません。いかに食べ物、食料が大切であるかということをもっと体験しました。

シベリア抑留記

和歌山県 織本 清

昭和二十年五月十日、綴芬河にいたが、現地召集となり、入隊後一か月もしないうちに、延吉へ衛生兵教育隊があるから行くように命令が出て、転属し、間もなく終戦を迎えた。

初年兵でもあることから何もすることもなく、気楽に構えて過ごしていた。延吉のいか所を集められた。千人くらい集まっていたと思うが、そこで兵舎跡の収容所へ収容された。

十月になって「日本に帰る」とのことで、身軽な姿にさせられて行軍することになった。どこまで行くのか、

腹がすいても小休止もなく、銃に囲まれながらの行軍が続いた。十日間くらい歩かされたと思う。

無蓋貨車に乗せられ、鍵をかけられ、夕方ともなると寒さが身にこたえる。どのくらいの時間を経たろうか。毛布から顔を出してみると、北の暁で灰色の空が見える。貨車がとまった。明らかにソ連領のそれとわかる四囲の荒廃たる風景である。

寒風吹き荒れる丸太小屋、コーリャン、粟、時には大豆粕やえん麦が主食、水で薄めたようなスープが飯盒のふたに一杯（少々の岩塩で味つけ）の食糧、何もしなくても飢死するのが当たり前の、まさに生死限界の生活環境である。

作業は原生林の山から山への伐採作業、ノルマ制である。倒れた者のノルマが残留者に加えられる作業量で、極寒の夜中もたたき起こされて作業が強制される。

伐採ときは身の危険も忘れて、木の苔や木クラゲ、茸類をあさっては、飯盒に入れスープの足にする。松葉の酒もつくって飲む。栄養失調者や鳥目、怪我人が日増しにその数を増すという状況である。倒れた戦友の看護